

岐阜県現代陶芸美術館
Museum of Modern Ceramic Art, Gifu

2003.5 Vol.1

CERA・PA

セラ・パ

〒507-0801 岐阜県多治見市東町4-2-5
tel.0572-28-3100 fax.0572-28-3101
<http://www.cpm-gifu.jp/museum>



■ごあいさつ

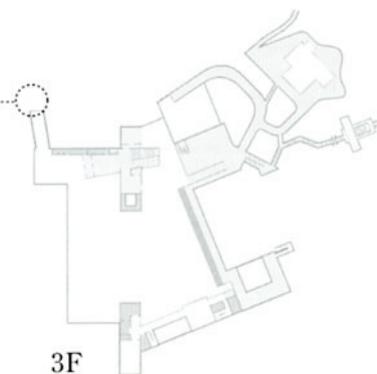
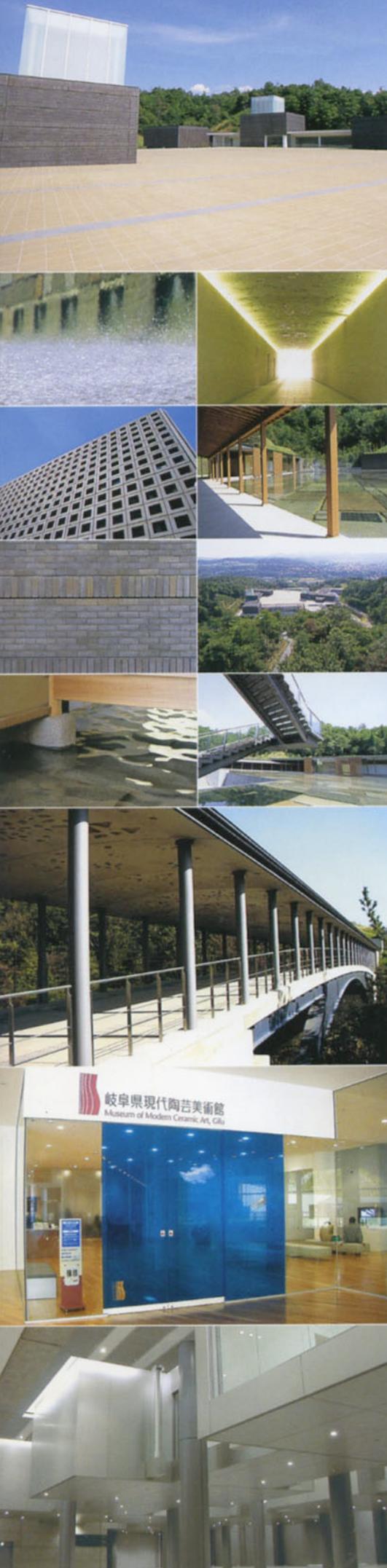
岐阜県現代陶芸美術館は、昨年10月12日、「現代」の「陶芸」に特化した美術館として開館いたしました。美濃焼の中心地である東濃地方に、磯崎新氏設計の現代建築の粋とも言うべき恵まれた施設を受けて発足し、また3年に1度開催される国際陶芸展の会場と同一建物にあり、共同で事業を展開できるという、きわめて有利な状況の下でのスタートです。発足にあたり、「現代」ということばの再定義、「陶芸」という言葉で示される範囲の再考などに取り組んで参りました。そしてその結果をふまえて開催したのが、開館記念展 part1「現代陶芸の100年 第1部・日本陶芸の展開 第2部・世界の陶芸」です。

私たちはここで「modern」の訳として「現代」を使い、第1部は明治以降の日本陶芸を「陶芸作家の誕生」という視点から概観し、さらに陶芸作家やデザイナーによる生活のなかで使用できる実用陶磁器を展示しました。また第2部では、スタジオポッターの多様なあり方をテーマ別に展開しましたが、それだけではなく、名窯ブランドを中心とした産業陶磁器もあわせて展示し、陶磁器に対して総合的に取り組む姿勢を明らかにしました。part1では約3万2000人の方がたに見ていただくことができ、館員一同感謝の気持ちでいっぱいです。しかし、私たちの活動はこれからがスタートです。まず館藏品などを展示する常設展を充実させ、さらにユニークな企画展を展開し、陶芸の楽しさを実感していただける美術館に育てていきたいと思っています。ここまでこぎ着けるためにご指導いただいた方がたや諸機関に対し心からお礼申し上げます、今後さらなる支援をお願いいたします。また、ぜひここ岐阜県現代陶芸美術館に重ねてのご来場を心からお待ち申し上げます。

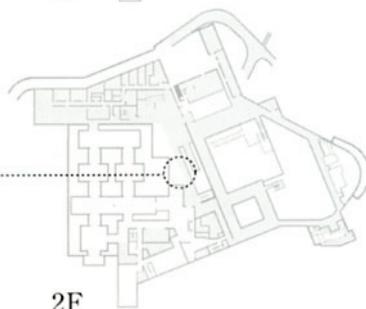
2003年5月

岐阜県現代陶芸美術館長 榎本 徹

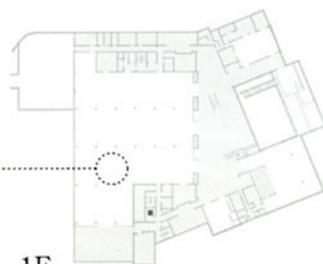
■施設紹介



3F



2F



1F

セラミックパーク MINO と現代陶芸美術館

岐阜県東濃地域は、美濃焼として知られる長い陶磁器の歴史を誇るとともに、現在では世界最大級の陶業ブロックを形成しています。この東濃地域において、文化振興と産業支援のために構想されたのが、セラミックパーク MINO です。セラミックパーク MINO は、初の文化と産業の複合施設として、現代陶芸美術館とメッセ施設（オリベスクエア）で構成されています。

設計は磯崎新氏が手がけましたが、そのグランドデザインは、自然環境との調和という点に特に配慮しています。里山の造成を最小限に抑え、谷には橋を架け、尾根にはトンネルを掘って、施設本体と駐車場を結んでいます。したがって建設の前と後でスカイラインはほとんど変化のないものとなります。施設本体も谷に収まるように建造されており、トンネルを出ると施設の屋上テラスに到達します。

もう一つの建築的特徴は、現代陶芸美術館に施された免震構造です。展示室（ギャラリーⅠ）全体が、より大きな架構造から吊られ、地震発生時に本体の架構が大きく揺れても、展示室は定点を保持するという、最先端の免震理論（並進振り子免震）が、初の試みとして採用されています。

現代陶芸美術館のコンセプトは、近現代・国内外の陶芸を収集・紹介するというものです。陶芸の専門館として時代を近現代に特化したという点も、当館の特色です。また収集作品は、個人作家の陶芸作品ばかりではなく、作家が手作りで少量生産する実用陶磁器や、量産を前提としながらモダンデザインの系譜に連なる産業陶磁器なども対象としますが、これも当館の特色ということが出来ます。

〈学芸部長 渡部誠一〉

収蔵作品紹介

初代宮川香山<1842-1916>

浮彫蓮子白鷺翡翠図花瓶

明治時代前期 h51.0×w26.4×d26.4

蓮池に立つ白鷺、そして花に戯れる翡翠がモチーフとなった作品である。その花瓶の表面を覆う枯れた蓮の葉には、虫食いの穴までが克明に表現されている。彫塑的な細工物が陶器に貼り付く大胆さとその写実の様子が目を奪うが、地の部分にも染付や金彩が施されており、細部まで作り込まれた作品である。これらは幾度もの焼成を重ね、計画的な創意により作品が完成されていることを物語っている。

初代香山（本名虎之助）は京都真葛ヶ原の茶碗屋を屋号とする陶家に生まれる。この真葛ヶ原にちなみ「真葛香山」と号した。万延元年（1860）、香山は19歳で家督を継ぎ、輸出用陶磁器制作の注文を受けたのを機に、明治3年（1870）開港間もない横浜に移住する。翌年、横浜の太田村で開窯し、真葛焼が誕生した。初期の作風は、薩摩風の陶器や、本作品のように陶器に浮彫りや精緻な細工物を施した作品であったが、後には陶磁製品へ転換し、結晶釉、窯変、釉下彩の研究に力が注がれた。それらの作品はフィラデルフィア万国博覧会（1876）で受賞以降、内外数々の博覧会や展覧会で高く評価され、ことに海外ではMakuzu Ware（真葛焼）の名で大好評を博した。明治29年には、香山は陶芸界で三代清風与平に次ぐ二人目の帝室技芸員に選ばれている。海外市場を睨む産業振興の機運を背景に、優れた技術と確たる芸術的感性のもと制作された本作品は、華々しく開花した近代陶磁に独特の彩りを加えている。

<学芸員 佐野素子>



撮影=斎城 卓

マイセン<1710- >

クロッカス模様テーブルセット

1896-1910年

ドイツのマイセンは、ヨーロッパで最初に磁器製作に成功した窯である。ヨーロッパでは、かねてより、東洋から運ばれる白い器（磁器）の美しさに魅了された各国の王が、競ってその開発に乗り出していた。そのような状況下において、錬金術師ヨハン・フリードリッヒ・ベドガーは、ザクセン選定侯アウグストII世の命を受け、硬質磁器製作に着手し、1708年にヨーロッパで最初の磁器製造に成功した。そして1710年には、アウグストII世がアルブレヒト城内にマイセン製作所を設立することになる。

柿右衛門写しやブルーオニオン（ザクロや桃、竹や菊が組み合わされた図柄。その模様が玉葱に似ているためこの名がついた）、フィギュリン（磁器人形）などで有名になったマイセンは、その後19世紀後半から1910年頃にかけて、有機性とシンプルさの二つの特質をあわせもつ、ウィーン分離派（1897年結成。過去の様式からの「分離」を目指した芸術家集団）のデザインに刺激を受けた作品を製作し始める。マイセンのこの時期を支えたデザイナーであるコンラト・ヘンツェルによって、デザインされた本製品はその一つである。この時期の製品としては初めて、形態と装飾が同時にデザインされた本セットは、1896年にマイセン製作所内で行われたコンクールのために製作された。その後、1900年のパリ万国博覧会で話題をよび、1902年にはディナーセットが、1904年にはティーセットが生産されるようになった。装飾のモチーフはクロッカスで、それは大きくデフォルメされ、葉脈は有機的な曲線となっている。形態・装飾ともに優雅な曲線を備えたこのテーブルセットは、高貴さと艶やかさを見事に表現している。

<学芸員 岩井美恵子>



撮影=斎城 卓

